

## 文芸批評雑話

一

中国現代の文芸批評の欠乏は、まぎれもない事実である。日刊新聞や月刊雑誌には多くの批評のような文章が載っているけれども、わたしからすれば、いずれも理想の文芸批評とは言えない。真の文芸批評とは、それ自身が一篇の文芸であるべきで、著者のある作品に対する印象と鑑賞を書いて、決して理知に偏った論断ではない。現在の批評の欠点はたいていがこの一点にある。

その一、批評する人は批評という言葉は毛を吹いて疵を求めることだと思っていて、少なくとも負の意味を含んでいる。だから文章では必ず非難軽蔑の言葉を吐かねばならず、まるでそうでなくては批評にならないかのようである。こうした非難の文が頼りとするのはむろん旧道徳あるいは新文化である。しかし批評の性質を見誤っていて、当然取るに足らない。

その二、批評する人は批評とはちょうど司法官のように、法律的な判決を下すことだ、この判決が一度下れば、作品の運命が決まってしまうと思っている。以前主義のセクトが文芸界を牛耳っていた時代には、こうした事は確かにあった。ジョンソンやベリンスキーなどはこうした流派の賢吏であったが、現代ではそうした方法はすでに通用しないし、こうした賢吏が少なくなったのはむろん言うまでもない。

この二種の批評の欠点は、世間には一種超絶した客観的な真理があり、万世の準則であると確信し、彼ら自身もきっちりこの真理を理解遵守し、したがって裁判に付与された権威を、彼らの批評の根拠としていることにある。これは“文は以て道を載す”を言うか、あるいは文学はすべからく労農のために作らねばならないと主張するものが容易にそうなるばかりか、あるアカデミーの理論を固守する批評家もすべてこの弊害を免れない。われわれはよく科学的な常識でもって文芸上の鬼神などの文句を反駁したり、あるいは数学の方程式で文章の構造を表したりするのを見る。これらの方法はあるいはすべて正しいのかもしれないが、文芸批評に用いるのは要するにあまりに科学的すぎる。科学的分析的な文学原理は、われわれ文学を理解しようとするものにとっても確かに必要であるが、決してすべてではない。なぜなら研究には分析が要るが、鑑賞は総合的でなければならないからだ。文学原理は技術者の工具のようなところがあり、孟子は“大匠は人に与うるに規矩を以てするも、人に巧を与う能わず”と言った<sup>i</sup>。われわれは学理を応用して文芸作品の方円をはかることはできるが、その巧に至っては規矩を用いて測定することはできない。科学式の批評は、永久不変の準則を固く信じているので、たやすく上文で述べたように偏執に入り込んでしまい、たとえ最もよい成績でも学問の範囲内の、たとえば文学理論・考証・史伝などのような、文芸研究に属し、文芸的な性質を持つ文芸批評とは違う。陶淵明の詩に、“奇文は共に欣賞し、疑義は相與に析す”という二句がある。いわゆる文芸批評とは奇文は共に欣賞す、つまり趣味の総合の事であり、疑義相與に析すとはまさしく理智の分析の仕事の一部である。

真の文芸批評は一篇の文芸作品であるべきであって、そこで表現されるものは対象の真相とい

うよりは、むしろ自己の反応と言える。フランスのフランスはその批評集の序で次のように言う。

“わたしの考えでは、批評は一種の小説であり、哲学や歴史と同じように、賢明で好奇心のある人々に読ませるものである。すべての小説は、正当に言えば、一つとして自叙伝でないものはなく、よい批評家とはその心霊が傑作の間を冒険するのを記述する人である。

客観的な批評は、客観的な芸術と同様決して存在しない。そうした自己欺瞞的に、彼ら自身の人格が著作の中の人々に混入することなどあった験しはないと信じるのは、まさに最も誤った幻影に騙された被害者であって、事實は、われわれは決して自分自身を脱することはできないのである。これはわれわれの最大の不幸の一つである。もしわれわれが一瞬にしろ蒼蠅の多面的な目で天地を観察できたなら、あるいは猩々の単純な頭脳で自然を思索したなら、われわれは当然それができたらう。しかしこれは絶対に不可能なことである。われわれは古代ギリシアのテイレシアスのように男に生まれたのに女になった記憶を持つことはできない。われわれは、ちょうど永久の監獄にいるように、自己の人格の中に閉じ込められている。最もよいのは、わたしから見れば、従容としてこの恐るべき状況を認め、しかもわれわれはただ自分を語るだけであることを自白することである、もうこれ以上沈黙を守れなくなった時には。

ほんとうを言うと、批評家は人々にこう言うべきである。みなさん、わたしはいまわたし自身のことを言おうとしています、シェイクスピアについて、ラシーヌについて、あるいはパスカルあるいはゲーテについて。少なくともこれ以上よい機会はありません、と。”<sup>ii</sup>

この言葉は極めてうまく言っていると思う。およそ文芸批評をする人なら誰もが注意すべきである。われわれは批評の文の中で、誠実に自己の感情思想を表現するのは、まさに詩文のなかでと同様である。たといそれを美妙的な文芸作品にすることができなくとも、要するにそこで判決を下したり欠点を指摘することではないと自覚すべきである。

## 二

われわれは人間共通の感情によってすべての芸術作品を理解することができる。しかし後天的に養成された異なる趣味によって、そこから違いが生まれ愛憎の見が出て来るに至る。これはなんとも致し方のないことだと認めるべきであるが、同時にこれはただ自己の主観的な受容と拒否にすぎなくて、作品の客観的な本質には影響できないことも知るべきである。なぜならその絶対的な真価はわれわれに見積もりできないものであるから。多くの司法派の批評家は無理やり条文によって確定的な判決を下そうとするが、過ちは永久不変の条文が文芸の良し悪しを評定する基準にできると信じることにある。それらの条文は実は一時一地の趣味的な項目でしかないのに、多数の付和雷同を経て、そこで権威になってしまう。このような趣味は初めは絶大な価値があっても、一旦固定してしまうと、石に化した美人のようにただ冷たく沈重な美があるだけ、あるいはただ冷たさと沈重がすべてを圧迫して無理やり屈服させるだけだと言った方がよいかもしれな

い。いまでは誰でもイギリスのキーツ (Keats) の詩をよさは知っている。しかし彼は生前“批評家”に痛罵され、彼は罵倒されて死んだのだと言う人さえあった。これはあるいは言いすぎかもしれないが、攻撃の猛烈さは想像するに足る。われわれは現代の状況を見て、キーツが罵倒されて死んだ事件に思い至ると、すこぶる不可思議なことがあるのを感じる。なぜいまでは誰でもキーツの詩のよさがわかるのに、その頃は堂々たるバックウッズ誌 (Backwoods magazine) の記者がこんなに浅薄であり得たのか。よさが解らなかつたばかりか痛罵までするとは。まさかその頃の文芸批評家の見識がほんとうに今の商人にも及ばなかつたのか。おそらくそうではないだろう。このわけは、その頃の趣味が十八世紀のもので、今のはキーツ以後の十九世紀のものであるからだろう。一般の批評家の程度は必ずしもそれほど離れていないだろうが、それぞれが同時代の趣味を固執していて、表面的にはいささかの違いがある。現代の批評家がバックウッズの記者の無識を笑いながら、一方では文学の名に借りて、存分にそこで異なる趣味の新しい“キーツ”を痛罵する。こうした事はよくあることだ。われわれは学校・社会・教育の各方面で知らず知らずに一種の趣味を養成し、一生の言行の指針とするのは、もともと何の珍しいこともないが、残念なのはこうした趣味は往往にして“去年”を限りとして、“今日”の事物を受け入れようとしない、しかも又それが近い時代一時の趣味に過ぎないことを承認しようとせず、それを永久不変の正道とし、それでもって一切を判断しようとする。そこでキーツの事件が文芸史上に絶えず書かれることとなる。だからわれわれは文芸作品を批評しようとする時は、一方ではきっと誠実に自己の印象を表出しよう、自己の表現に努力しようとし、もう一方では自分の意見は偶然の趣味の集合にすぎず、決して他人を圧迫服従させる権威などあるわけのないことをもっとはっきりさせなければならない。批評は自分が言いたいことに過ぎず、他人を裁判することではない。文芸批評において誠実と謙虚という二つを具えることができれば、バックウッズの記者のような失敗は免れることができるだろう。

以上の話は、われわれ普通の人間自身が平凡な人間を知るために言ったにすぎないもので、真に超越した批評家については当然また別に論ずべきである。われわれ普通の人間の趣味はたいていが“去年”のもので、せいぜいが“当日” (Up to date) のものに過ぎない。しかしながら“精神の貴族”である詩人は、彼の思想感情は多くが“明日”のものだと言える。したがってこの両者の間には常に若干の距離が保たれ、接触が容易でない。われわれは文芸史上の事件に鑑み、賢くなり、去年の頭脳で明日の思想を叱責しようとせず、感じたところをそのまま表白しさえすればよいのだ。しかしほんとうに遠すぎるどころの事となると、もう何も言えないし、その時には本当の批評家が出現して、われわれを助けてくれるのを待つしかない。彼の批評の態度はやはり誠実と謙虚の二つを具えているだろう、ただ彼も“精神の貴族”であり、彼の趣味も現代を超越して遠く未来に及ぶから、同様に深く広い精神を理解でき、指し示し、新しい趣味を作り上げることができるだろう。当時は人に罵倒されたがのちに復活でき、あるいは偶像になった詩人たちは、みなこうした真の批評家が彼を泥沼から引き上げたのである。だがこれは強いてできる事ではないし、人々がやれる事ではない。普通の人がこのような真の批評家になろうとしても、かえって溝にはまるだけで、美玉を捨てて石ころを宝とするような失策を免れない。ただ自

己を表現して批評し、別の考えさえなければ、何の妨げもなく、上手く書けた時には一篇の美文となることもあり、別の価値を持つだろう。他の創作もこのようである、というのは徹底して言えば批評とはもともと創作の一種でもあるからだ。

※初出：1923年2月

---

<sup>i</sup> 『孟子』の「告子篇」には「大匠は人に誨うるに、必ず規矩を以てす」という言葉はあるが、後の句は見えない。

<sup>ii</sup> On Life and Letters. a translation by A. W. Evans. John Lane, The Bodley Head. London. pp. 7~8.